

女子優勢出生地域の実態調査

三宅 宗雄

A Study on the regional Superiority of female Birth-rate

Muneo Miyake

序

昭和26年4月1日より京都府与謝郡宮津町に合併せられた1農村地域が過去に於て女子を優勢出生していた事実を知り、之が土地及び家庭の状況を調査したので、茲に其の成績を報告する。

抑も人類の出生時性比(女子100対男子の比率)は Parkes, Hartwig 氏等(文献2.5)に拠れば、歐洲人は103~103、日本人は104(丸岡氏(文献8)の多数統計調査に拠れば104.772)にて、凡て男子が優勢出生している。

近年人類に於て統計的、臨床的に(文献6.7.9.10)、又家兎、廿日鼠、白鼠等の哺乳動物その他に就いて実験的に(文献2.3)、性の支配に関する研究が行われているが、現在、人為的に性を確実に支配し得ると結論づける段階には到っていないようである。

本報告はこの出生と性の研究に一資ともなれば幸甚とする所であり、併せて諸賢の御指教を希望するものである。

第1章 土地の概況

1. 位置——本地域は名勝天ノ橋立を控えた宮津町の市街地より南へ1軒の地に始まり、南西に畧々楕円形に長径約8軒に延びる農業地帯にて、其の南西端は鬼の伝説やニッケル鉱にて有名な大江山の千丈が原に続いている。

2. 人口——昭和20年終戦の年以前は1,300人台より1,200人以下に減少したが、終戦後1,400人台に復活した。

其の年齢構成に就いて終戦の前後を比較すれば第1表の如く、共に15歳未満の者が最も多く、全人口の約4割を占めており、次に多い年齢層として終戦前は51歳以上の者であり、終戦後は31—50歳の者となっている。又終戦後の15歳未満層に於ては、女子よりも男子が少々多い以外は、各年齢層とも終戦前及び後とも女子が多数であり、全人口を通じて女子が絶対的に優勢となる。

第1表 年齢構成別人口

年齢階層	昭和19年度				昭和22年度			
	男	女	計	配分比率	男	女	計	配分比率
0~15歳	184	194	378	31.5%	232	217	449	31.5%
16~30歳	90	146	236	19.8%	155	181	336	23.6%
31~50歳	130	136	266	22.4%	174	199	373	26.1%
51~	147	166	313	26.3%	121	143	269	18.8%
計	551	642	1,193	100.0%	632	745	1,427	100.0%

3. 出生状況——第2表に示す如く、本地域の昭和5年(1930年)以来の統計に拠れば、男子出生が女子出生に優勢したのは、昭和5.7.16年の3回であり、男女出生性比の等しい年は4回で、これらを除く他の年では女子出生が絶対優勢している。

斯くて終戦前の14年間の平均値は、女子出生100に対する男子性比は94.3であり、又終戦後の最近3年間の平均値は70.8であって、両者を通じ即ち昭和5年より25年迄の期間(終戦直前及び直後の年は不明)の性比は平均92.1(出生数は男子317、女子344)となる。尤も終戦直前及び直後の年は不明であるが、終戦後の人口年齢構成の状況から観て、恐らく男子出生が少々優勢したものと考えられる。

之を要するに本地域は過去に於て女子を優勢的に出生していた事が指摘出来る。而も女子優勢出生の年は、概して本地域の出生率が京都府又は全国の出生率に比べて比較的高い年に相当するようである。殊に全国的に比べ本地域的として最も高い出生率の年であった昭和10年の如きは、女子出生が男子出生に比べて約倍に近い数を示している。

なお終戦後の女子優勢出生の年は本地域出生率として

福祉児童学科教授 本論文の要旨は昭和27年11月2日京大小児科開設50周年記念講演会に発表した。

doct. med., prof. of paidology, Saikyo University.

第2表 出生状況

西 曆	昭 和	人 口	出 生 数		出生性比 (♀100 に付)	出生率(人口1,000に付)				備 考
			男	女		本地域	本 郡	京都府	全 国	
1930	5	1,330	28	21	133.3	35	31.34	28.05	32.4	浜口首相暗殺 満州事変 上海事変
	6	1,342	31	33	93.9	45	31.59	25.56	32.2	
	7	1,345	18	15	120.0	24	31.75	23.05	32.9	
	8	1,352	20	21	95.2	31	30.8	26.07	31.5	
	9	1,328	15	15	100.0	22	28.42	24.54	30.0	
1935	10	1,295	16	31	51.6	36	26.62	26.16	31.7	国連脱退
	11	1,245	15	15	100.0	24	26.18	24.35	30.0	
	12	1,240	19	21	90.4	32	29.28	21.3	30.8	
	13	1,193	16	16	100.0	27	21.64	20.3	27.1	
	14	1,179	13	15	86.6	24	19.89	19.53	26.6	
1940	15	1,242	18	20	90.0	30.5	24.43	24.65	29.4	第二次世界大戦 に突入
	16	—	17	12	141.6	—	—	26.9	31.1	
	17	—	11	11	100.0	—	—	26.1	30.2	
	18	—	9	11	81.8	—	—	—	30.2	
	19	1,193	—	—	—	—	—	—	—	
1945	20	—	—	—	—	—	—	26.2	—	終戦
	21	1,453	—	—	—	—	22.55	22.8	—	
	22	—	—	—	—	—	31.87	30.6	34.3	
	23	1,427	19	27	70.3	32.0	32.35	30.3	33.4	
	24	1,439	16	24	66.6	27.8	31.39	23.9	33.2	
1950	25	1,423	16	21	76.1	26.0	25.4	22.6	28.3	
平均		1,317	計 317	344	92.1	29.7	27.8	25.42	30.8	
			661							

は全国平均に比べ寧ろ低率に属する年である。

曾田氏外3氏(文献6)の調査に拠れば、戦前戦後の本邦に於ける出生性比には、年次変動は認められないとの事である。

次に出生と季節の関係を観るに、第3表の如く、出生月別の男女児数を、更に1年の前半と後半に分けて集計すれば、本郡全体での前半、後半の男女児の生まれ方は、大体男子の多く生まれる形式であるが、本地域に於ては前半では明らかに女子が優勢出生している。従って本地域に於ては、冬期受胎は男女児数均等性を示しているが、

第3表 季節と出生性別

	1~12月		1~6月		7~12月	
	男	女	男	女	男	女
昭和24年						
本 郡	1,116	1,063	592	560	524	503
本 地 域	16	24	8	17	8	7
昭和25年						
本 郡	916	840	473	430	443	360
本 地 域	16	21	10	15	6	6

春夏秋期受胎は女兒が優勢出生する事を思わしめる。

4. 死流産状況——性比を論ずるに当り、其の個人及び其の地域に於ける死産児、流産児等の胎児の性比、即ち第1次性比が検討されなければならない。

斯うした胎児の性比はHartwig氏に拠れば、女子100に対し男子123—142と云い、又死流産併せて160との記載もあり、殊にCiocco氏(文献5)は妊娠2ヵ月431、3ヵ月361と云う大なる数を示しており、何れも胎児に於ては男性が断然優勢である事を表わしている。

従って死産流産の多い個人又は地域に於ては出生時若しくは出生後或る期間成長した時の性比、即ち第二次性比は当然男子出生が少なくなって来るものと考えられる。

本地域に於ける死産流産の状況は如何であろうか。個人並びに地域に就いての探求の結果、本地域に於ける死産流産は、他の地域に比べて特に高率であるとは言えない。尤も流産に関する適確なる数字は得にくい。配偶者を有する主婦会での調査によれば、90名の出席者中、流産経験者は3名であった。死産に関しては死産届出により、比較的正確に近い数を求める事が出来る。夫れに拠れば

本地域に於ける死産胎数は年間1—2胎の範囲であり、男性が多い。又本地域の死産率は第4表の如くである。

第4表 死産率 (出産1,000に付)

昭和	本地域		本 郡		京 都 府	
23	1胎	21.74%	106胎	45.07		
24	1	24.39	162	69.2		
25	2	51.23	171	88.73	4,678胎	101.4%

(昭和25年出産数本地域39, 本郡1,927, 京都府46,133)

5. 死亡状況 (1) 死亡率

第5表 死亡率 (人口1,000に付)

昭 和	本 地 域	本 郡
23年	11.80%	11.93%
24	7.64	10.86
25	9.14	11.34

本地域の死亡率は郡全体の死亡率よりは低い(第5表)。更に本地域に於ける男女間の死亡状況を見るに、昭和5年より18年迄の14年間総死亡数の比は、男子死亡100に対し女子は89.5であり、特に当時各年齢層とも女子過剰の時代であった点から観て、女子人口対女子死亡率は男子の場合に比して遙に低率となるべきである。

(2) 年齢層別死亡状況

第6表 年齢層別死亡配分率

年齢階層	本 地 域	全 国
	昭和9~18年の10年間の平均値より算出	昭和13年の値より算出
0~19歳	7.5%	39.02%
20~39	13.8	14.66
40~59	13.3	15.03
60~79	33.5	24.56
80~	26.4	6.73
	100.0	100.0

第7表 死亡実数と婚姻

		昭和23年	24年	25年
満1年未満	男	0	1	0
	女	2	1	1
そ の 他	男	7	6	5
	女	8	3	3
計	男	7	7	5
	女	10	4	4
婚	姻	21	22	11
離	婚	1	1	1

第6表に示す如く本地域は十九歳未満の若年齢層に死亡極めて少く、其の反面60歳以上の老年層の死亡が多い。この現象は当時本地域の年齢構成が青少年並びに老壯年齢層に高い点から観て、特に小児の死ぬ事が少く、老人の死ぬ事の多い事は、本地域が或程度小児及び老人の楽土であり温床であったとも言える。

(3) 死因 (昭和9年より18年迄の総合)

死因の第1位は老衰であり、以下脳溢血、結核、肺炎、心臓病、脳膜炎、胃腸疾患等の順序である。死因の全国的順位は当該期間では脳溢血が第1位であり、以下肺炎、結核、老衰の順序となっている。本地域での第1位が老衰である事は住民が天寿を全うする者の多い事を示している。

(イ) 老衰 死因の第1位の老衰死は当該期間に33名あり、60歳代1, 70歳代9, 80歳代16, 90歳代7にて、殆ど全部に近い者が70歳以上で、而も80歳代が半数を占めており、この点から観ても本地域が老人の楽土である事が判る。

(ロ) 脳溢血 当該期間中の脳溢血に因る死亡者25名で、内、男15名。死亡の最も多い年齢は男70—79歳(平均73歳)、女80—89歳(平均79歳)で、老衰の場合と同様、相当高年齢である。職業的に観て其の90%が農業であり、従って農業者の脳溢血に因る平均死亡年齢が都会人の場合に比べて遙に年齢高であると言える。

(ハ) 結核 昭和9年より17年迄の期間に於ける結核に因る死亡者は19名、内、男10名で、又死亡の最も多い年齢は男31—40歳(全平均42歳9)、女21—30歳(全平均30歳4)となり、矢張り男子の死亡年齢が女子の場合より高く、而も男女とも平均死亡年齢は都会人の場合に比べて年齢高である。なお職業的に観れば過半数の12名が無職であり、殊に独立生計を持たない女子が大部分である。有職者としては農業者5名、勤人2名となっている。

第2章 ^{アザナ} 字区域の比較調査

1. 人口性比及び出生性比——本地域は三つの字区域に大別出来る。宮津町の市街地に近い比較的平坦なK区(本地域人口の44%を占む)及びI区(15.3%)と、市街地より最も遠く四方が山に囲まれている山間地であるO区(40.7%)がある。人口的に観て女子の多い区はK区とI区であり、之に反しO区は男子が多い。

特に女子の最も多いK区では、宮津の市街地その他への通勤者が多数を占め、農業としては半農家が多い。出生性比は昭和10年より20年上半期迄の出生児157名中、女兒が53.5%を占め男児は46.5%である。又昭和23年より25年に至る終戦後の3年間では、出生児56名中、女兒が62.5%、男児は37.5%で女兒が断然多く生まれている。結局K区では終戦前後の期間を通じて女兒出生数119名に対し男児94名であって、女兒が55.9%、男児44.1%の配分比である。

之に反して女子よりも男子の多いO区では、純農家が

大多数であって、出生児の性比状況は前記終戦前の期間に於て197名中、男児出生が52.3%、女児47.7%となり、終戦後は男児21名、女児23名計44名にて、女児が僅に多く生まれ、男児出生47.7%、女児52.3%となり、全期間を通じて男児124名、女児117名即ち男児出生51%、女児49%にて、結局男児が少々多く生まれている。

なおI区に於ても全期間を通じて男児出生40名、女児48名にて、女児が少々多く生まれている。

2. 農業の在り方——女児を多く生むK区と男児を少々多く生むO区に於ける農業の在り方は一言にして云えば、前者は半農が、後者は純農が多い事になり、第8表に示す如き水稻植付反別による世帯比率及び家族員数の関係からも窺ける。

第8表 水稻植付反別の比較(昭和18年調査)

植付反別	K 区		O 区		全国平均世帯比率
	世帯比率	一戸平均家族員数	世帯比率	一戸平均家族員数	
無 作	13.4%	3.5人	0%	0人	3%
5反以下	40.0	2.75	44.4	4.15	34
5反~1町	40.0	4.0	27.8	5.6	33
1町以上	6.6	6.0	27.8	6.6	30
一戸当り平均家族数	—	3.76	—	5.33	
平均年齢	—	33歳	—	35歳	

女子の優勢出生を示すK区では植付反別1町以下の小農若しくは半農家が多く、而も1戸当り家族員数3人7の比較的小人数であり、又農家以外の無作者が相当数見られる。之に対し男子の少々多く生まれるO区では1町以上の中若しくは大農家で純農家が多く殊に無作者がない。而も1戸当り家族員数は5人3にて、K区に比べて働き手の多い事が窺われる。

なお昭和14年全国農家の平均耕作反別は1戸当り1町6畝で、特に近畿地区は僅に0町69に過ぎない実情であって、而も1町6畝以下の農家が全農家の70%を占めている。本地域の両区は全国的に観て小農家の多い地域と言ふべきである。

3. 夫婦世帯率——昭和19年6月調査に拠れば、総世帯に対する婚姻世帯は、女子優勢出生のK区で32.2%、男子優勢のO区で25.4%であり、K区の方が夫婦世帯率が高い。

4. 罹病状況——昭和18年度の国民健康保険組合での成績に拠れば、第9表に示す如く、女子優勢出生のK区は男子優勢のO区に比べて受診率は半減に近く、従って医療費の負担も軽少である。両区とも耳鼻咽喉疾患や眼病が多いが、この外にK区では胃腸病、O区では婦人病や外科疾患が目立っている。

第9表 受診状況(昭和18年度調査)

	K 区	O 区
受診率(月平均)	人口の6.8%	12.9%
年医療費(一戸当り)	円 12.04	円 14.37
疾病内容	耳鼻咽喉病多く次は胃腸病、眼病	婦人病、耳鼻咽喉病多く次は眼病、外科疾患

第3章 女子優勢出生家庭の検討

1. 家系状況——本地域に於ける家庭中、特にK区、I区で多数の子女を生み而も女子を優勢出生した家庭に就いて、其の家系状況を調査した。其の結果女子を優勢出生した家庭の家系には女子の多産が見られ、而も結婚は同地域生まれの者同志であるとか、又は血族結婚者である事が指摘せられる。初婚年齢は男子22—24歳、女子17—18歳が大多数である。其の代表的な一部実例として子女数の多い者から順序に掲げて見れば第10表に示す如く女子優勢出生家庭では女子優勢出生の家系を持ち、而も両親は血族又は同地域生まれ同志の結婚者である。

第10表 家系状況の実例

実例	子の数			○印は女子が多い				結 婚	
	男	女	計	孫	父の同胞	その母の同胞	その子	血族	同地域生まれ
A	3	8	11		○		○	○	○
B	1	8	9	○				○	○
C	1	7	8			○	○	○	○
D	1	6	7	○		○	○	○	○

2. 夫婦の職業状況——第10表に示したA家庭の主人は公務員、Bは吏員、Cは4年前迄公務員、Dは5年前迄会社員であり、何れも主人が昼間勤めに出て不在となる家庭である。従って主婦は何れも農耕を職業に持ち、Aの主婦は8—9反を、Bは6反を、Cは7反8畝を、Dは祖父母と共に5反を(主婦1人の時は3反を)夫々主人の昼間不在中に耕作している。この点主婦は家事、育児等の仕事の外に女手としては相当広範囲の農耕に従事して、身体的、精神的に過労の実情に在る。之に対し男子を少々多く出生しているO区の家系の大多数は、主人と主婦が共々農耕を営んでいる。

之を要するに女子を優勢的に出生した家庭若しくは地域では、主人に比べて主婦が格段に労働過重の状態に在る。

総 括

天ノ橋立を控えた京都府与謝郡宮津町に合併せられた一農村地域に於て、過去昭和5年以來、女子を優勢的に

出生して来た事実並びに其の現地調査成績を發表した。

1. 本地域の人口は終戦前、男子100に対し女子116.5、又終戦後100対110.5であって、女子の過剰を示している。
2. 本地域の女子人口優勢の一原因として、女子の優勢出生を挙げ得る。
3. 男女別出生の性比は終戦前14年間の平均値は女子出生100に対し男子94.3であり、又終戦後の3年間の平均値は男子70.8であって、この両期間を通じて即ち昭和5年より同25年に至る期間（但し終戦の直前及び直後の年間は不明）の出生性比は女子100対男子92.1である。
4. 本地域の出生率が本郡又は京都府又は全国の平均値よりも高い年には、概して本地域の女子出生率が上昇している。
5. 出生性比に深い関係ありと言われる死産流産は本地域に於ては他地域に比べて高率ではない。
6. 女子の優勢出生は1年間の前半期に著明である。
7. 本地域は19歳未満の若年齢層の死亡極めて少く、其の反面60歳以上の老年層の死亡が多い。
8. 女子を優勢出生する字区域は市街地に近い平坦地域であり、之に反し市街地より遠く隔たり四囲山に包まれた地域では男子が少々多く生まれている。
9. 女子を優勢出生する区は半農家が多く、特に女子を多数出生した家庭に於ては、主人は勤め人であり、主婦は昼間主人の不在中に家事、育児の外に、3—9反の農耕を営んでいて、主人に比べ労働過重の状態に在

る。

10. 男子を少々多く出生する区は、純農家が多く、其の家庭に在っては主人と主婦が共々農耕に従事しているため、主婦の労働負担が軽くなっている。
11. 特に多数子女を生み而も女子を優勢出生した家庭は女子優勢出生の家系を持ち、血族結婚又は同地域生まれ同志の結婚者である。
12. 本地域に就いて死亡並びに疾病の状況を併せて調査した。

終りに当り、本調査に就いて多大の御協力御援助を頂いた兼井あや、久保操、太田寿子諸姉及び粉川肇氏の各位に衷心謝意を表するものである。（23.10.10）

引用文献

- 1) 医学統計法の理論と其応用（古屋芳雄氏）。
- 2) 遺伝学（有賀久雄氏）。
- 3) 性（岡田要、木原均両氏）。
- 4) 性とは何か（ルイ・ガリヤン—湯浅明氏訳）。
- 5) スターン人類遺伝学（田中克巳氏訳）。
- 6) 民族衛生16巻5,6号（曾田良宗氏外三氏）。
- 7) 遺伝学雑誌25巻5,6号（高橋英次氏）。
- 8) 医学研究22巻3号（丸岡彦夫氏）。
- 9) 産科と婦人科19巻11号（神野柳緑氏）。
- 10) 同 20巻1号（岩脇隆興氏）。

（1953年10月受理）